3. 市場調査

(1) 漁獲状況調査と市場価格について　　(橋本佳樹)

目　　的

セタシジミの漁獲の現況と、市場動向の実態を把握するため実施した。

方　　法

県内の貝採捕漁業者に対し、１９９０年１月１日より図７に示した漁獲日誌の記載を依頼した。

依頼した漁業者は、堅田漁業協同組合員４名、中主漁業協同組合員１名、近江八幡漁業協同組合員１名、彦根市松原漁業協同組合員３名、沖島漁業協同組合員１名の計１０名である。

結果および考察

組合別の月別漁獲量と生産額を表６に示した。

水揚日	___月___日
桁網の大きさ	ヨコ_____cm×タカサ___cm
ツメの有無	有　　無
操業時間	___時___分～ ___時___分
一回あたり曳網時間	時間　　分

	個数(kg)	重量(kg)	金額(円)
シジミ			
マルドブ			
タテボシ			
イケチョウガイ			
タニシ			
その他			
今日の総水揚高			

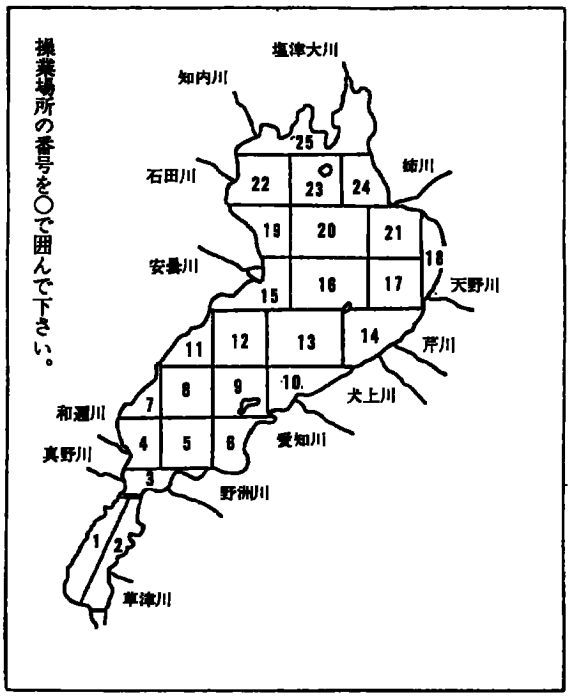

図７　漁獲日誌

表6　平成2年1月～12月分　組合別セタシジミ水揚高と単価

組合	調査した漁業者数	年度	1月分		2月分		3月分		4月分		8月分	
			漁獲量(kg)	生産額(円)	漁獲量(kg)	生産額(円)	漁獲量(kg)	生産額(円)	漁獲量(kg)	生産額(円)	漁獲量(kg)	生産額(円)
堅田	4人	'90	7,293	1,678,300	6,382	1,528,510	7,290.5	1,810,950	5,753	1,257,240	3,597	1,066,700
中主	1人	'90	—	—	435	130,700	604	211,400	458	160,350	—	—
近江八幡	1人	'90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
松原	3人	'90	822	271,700	743	244,210	682.2	225,226	571	187,665	1,456	480,480
沖島	1人	'90	795	278,250	976.5	292,950	1,284	385,200	1,124	370,920	1,180.5	389,475
計	10人	'90	8,910	2,228,250	8,536.5	2,196,370	9,860.7	2,632,776	7,906	1,976,175	6,233.5	1,936,655

9月分		10月分		11月分		12月分		合計		単価 円/(kg)
漁獲量(kg)	生産額(円)	漁獲量(kg)	生産額(円)	漁獲量(kg)	生産額(円)	漁獲量(kg)	生産額(円)	漁獲量(kg)	生産額(円)	
5,130	1,431,800	6,984	1,938,000	8,663	2,540,950	4,830	1,378,980	55,299.5	14,631,430	141～450
577	201,950	544	190,400	—	—	—	—	2,618	894,800	300～351
2,225	667,500	2,159	647,700	1,885	622,050	1,410	465,300	7,679	2,402,550	300～330
1,095	368,780	1,621	537,675	1,490	488,080	755	249,150	9,235.2	3,052,966	231～458
693	228,690	847.5	279,675	1,356	406,800	722.5	180,625	8,979	2,812,585	250～350
9,720	2,898,720	12,155.5	3,593,450	13,394	4,057,880	7,717.5	2,274,055	84,433.7	23,794,331	平均 283

調査した漁業者１０人の１～１２月までのセタシジミの漁獲量は、１人１回あたり６～４００kgと個人差があり、調査した９ケ月間の総漁獲量は約８４ｔ、生産額は約2,４００万円であった。調査した組合員以外に貝曳網漁業を営む者は１２人程度（散発的に操業する漁業者はかなりいる。）と思われる。そこで、５漁協１０人の結果から推定すると、１９９０年度の県下全体のセタシジミ総漁獲量が、約１８５.７ｔ、生産額が、5,２３６万円となる。

県下貝採捕漁業の中心組合である堅田漁業協同組合は、９ケ月で約56ｔを漁獲し、1,463万円の生産額をあげている。これは調査した総漁獲量で６６％、総生産額で６１％を占めている。

漁獲量および生産額の経年変化を図８に示した。

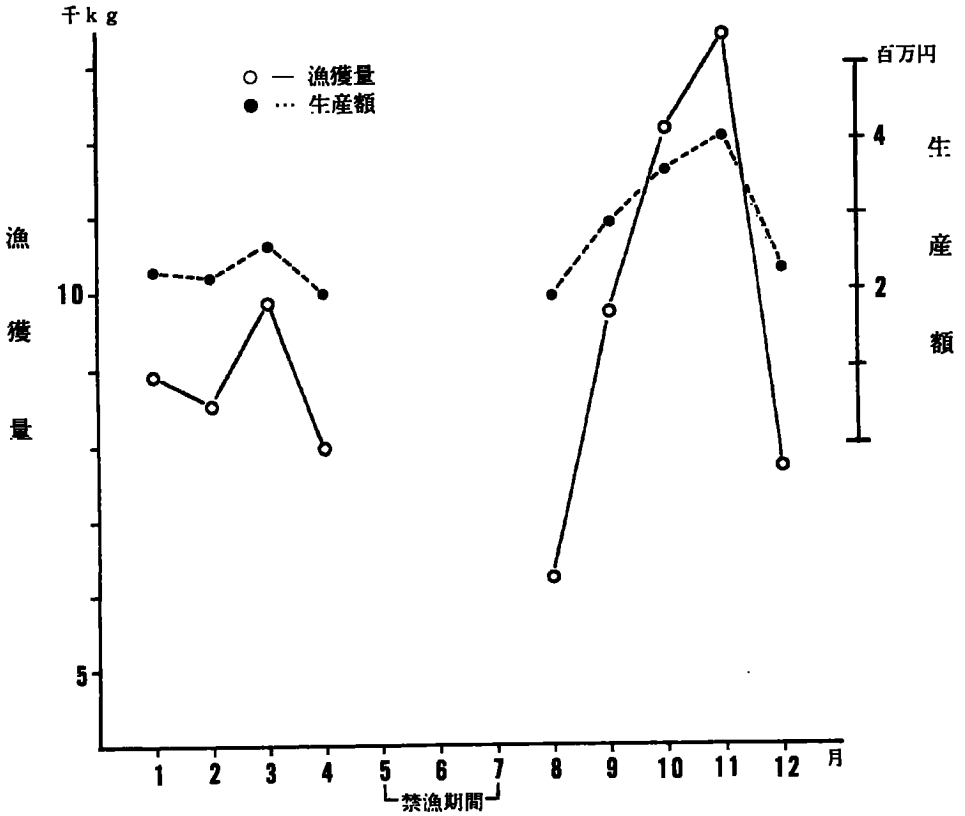

図８　平成２年度抽出組合のセタシジミ漁獲量および生産額の経年変化

漁獲量が最も多いのは１９８９年と同様１０月で、単価も２９６円／kgと平均を上回っている。また単価が一番高い月は、解禁直後の８月の３１１円／kgであった。その後年内は、３００円前後で推移するが、１月になると２５０円／kgに急落し、４月まで２５０円前後が続く。

セタシジミも、ヤマトシジミ同様、夏期よりも冬期から春期のほうが美味である（ただし５～７月は産卵保護のため採捕禁止）。しかし冬期の値段が下がるのは、他の水産物（アサリ、ヤマトシジミ等）と競合すること、および単価の安い外国産の輸入品に押されていることが大きな原因である。

次に、混獲されたその他の貝類について、出漁状況と漁獲量を図９～１２、表７～１０に示した。

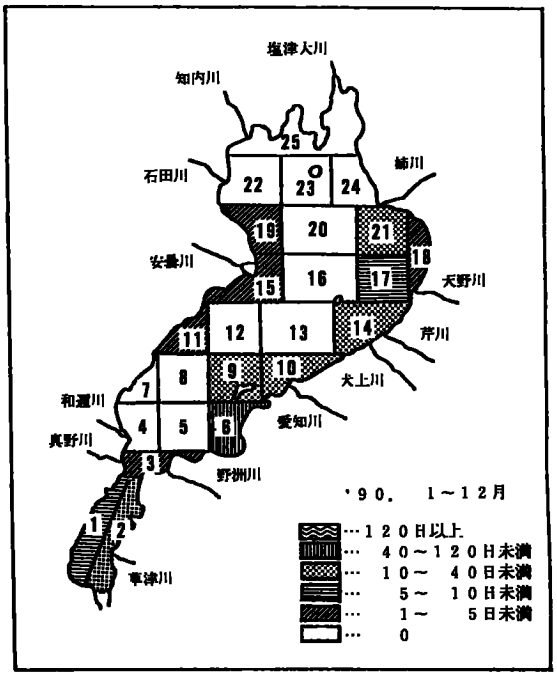

図９　タテボシ漁獲出漁状況調査
図中の数字は水域のナンバーを示している。

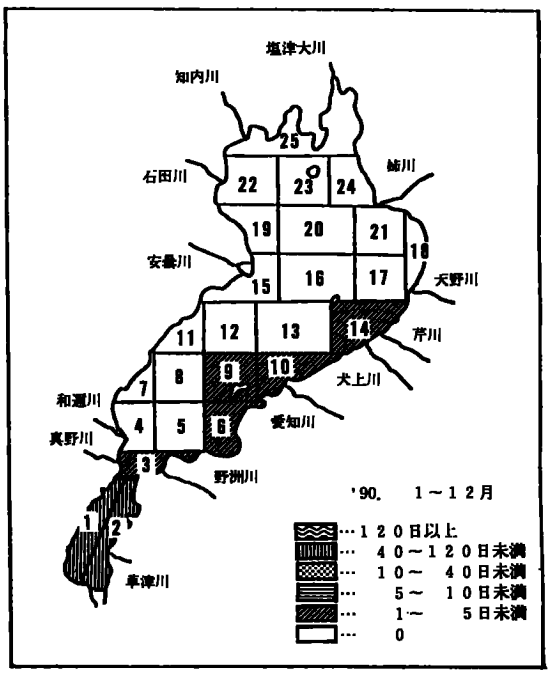

図１０　マルドブ漁獲出漁状況調査
図中の数字は水域のナンバーを示している。

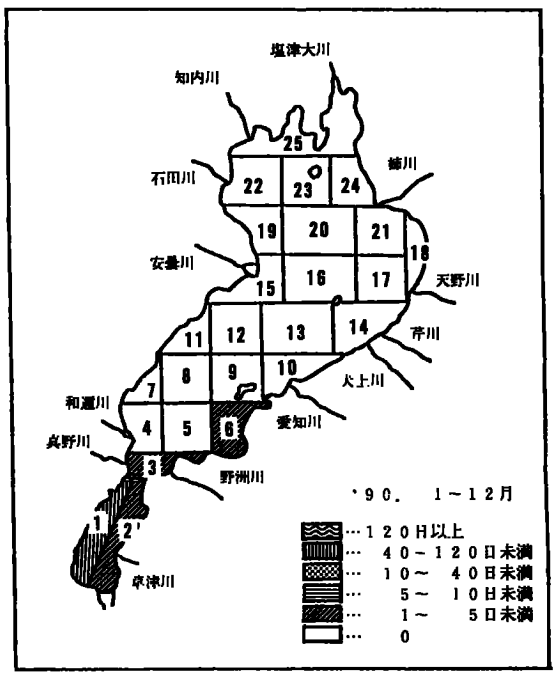

図１１　イケチョウガイ漁獲出漁状況調査
図中の数字は水域のナンバーを示している。

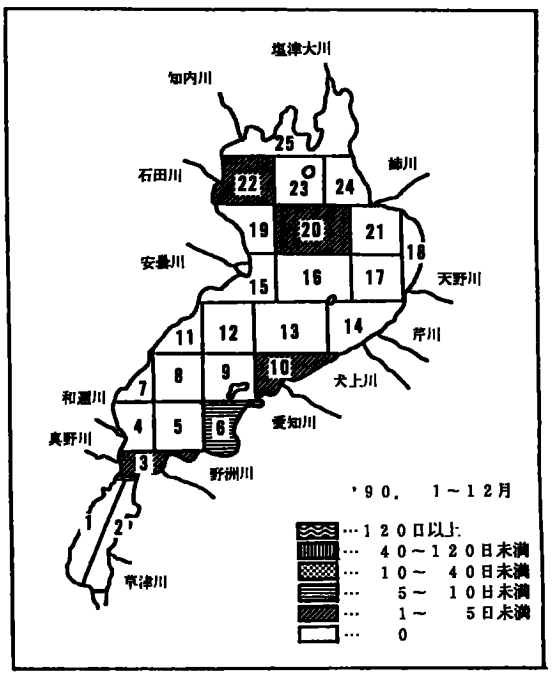

図１２　タニシ漁獲出漁状況調査
図中の数字は水域のナンバーを示している。

表7　平成2年1月～12月
水域別タテボシ水揚高　（調査した漁業者数　10人）

水域 No.	延出漁日数	漁　獲　量（kg）	生　産　額（円）
1	5	251	31,500
2	27	1,900.7	572,860
3	3	95	19,000
6	50	1,036.5	217,875
9	13	330	141,190
10	24	370.5	150,875
11	1	16	5,600
14	21	262.2	96,833
15	2	52	14,400
17	9	488	127,080
18	3	57	16,290
19	3	62	17,360
21	11	387	99,940
計	172	5,307.9	1,510,803

表8　平成2年1月～12月分
水域別マルドブ水揚高　（調査した漁業者数　10人）

水域 No.	延出漁日数	漁　獲　量（kg）	生　産　額（円）
1	75	6,117.5	1,329,735
2	44	5,474.4	1,249,806
3	3	18.5	5,000
6	4	11.5	2,300
9	1	144	28,800
10	2	2.8	1,100
14	1	9.9	3,485
計	130	11,778.6	2,620,226

表９　平成２年１月～１２月分
水域別イケチョウガイ水揚高　（調査した漁業者数　１０人）

水域 No.	延出漁日数	漁　獲　量（kg）	生　産　額（円）
1	57	209	――
2	1	5	――
3	3	6	――
6	2	37	――
計	63	257	――

表１０　平成２年１月～１２月分
水域別タニシ水揚高　（調査した漁業者数　１０人）

水域 No.	延出漁日数	漁　獲　量（kg）	生　産　額（円）
3	2	2	2,600
6	7	7	9,100
10	1	1	1,300
20	1	2	3,000
22	1	17	25,500
計	12	29	41,500

タテボシは、セタシジミと同様な分布、もしくはやや泥地を好む傾向がある。よってセタシジミと混獲されることが多く、No.６，９，１０，１４のセタシジミ漁場で混獲されている。

また泥地を好む傾向および餌料等の成育環境条件の差から、南湖のタテボシは北湖に比較して大型である。No.２の出漁日数および漁獲量が多いのは、そのような大型タテボシを専門に漁獲する漁業者がいるためである。しかし１９８８年度は、南湖だけで漁獲量、生産額ともに、全体の７８％を占めていたが、１９８９年度は約３６％、１９９０年度は約４０％と、南湖の操業は減少している。１９９０年度の総漁獲量は約５３ｔ（延出漁日数１７２日）で、生産額は約１５１万円であった。

マルドブ貝は例年どおり、南湖のNo.１，No.２での漁獲が多く、他の水域はタテボシ同様セタシジミと混獲される程度である。１９９０年度の総漁獲量約１１ｔ（延出漁日数１３０日）で生産額は約２６２万円であった。そのうち南湖が全体に占める割合は、漁獲量、生産額ともに約９８％で、ほとんど南湖が主要な漁場となっている。

イケチョウガイの漁獲量の約８１％が、南湖のNo.１で占められており、後はNo.２、No.３、No.６で、その他の水域では全く漁獲されていない。イケチョウガイを漁獲している組合は、堅田の漁業者のみで、総漁獲量は２５７個（延出漁日数６３日）であった。

次に、タニシもセタシジミとの混獲で水揚げされ、総漁獲量２９kg（延出漁日数１２日）、生産額約４万円であった。